

## はじめに

---

本書は大学入試問題に出題された英文を主な題材として、学校や塾・予備校でほとんど教えられることがなく、従来の学習参考書でもめったに取り上げられることのない、英語の文法現象を読者の皆さんと共有することを目的としています。英語が好きで、「英語について少しでも詳しくなりたい」とお考えの方には必ず役に立つ本だと自負しています。英語好きであれば、英語の先生も、大学生も、社会人の方も、誰でもお楽しみいただけたらと思います。

また、学校などでひと通り英文法を学んでいれば読めるように配慮していますので、もっとレベルの高い英文法を知りたい、細かいことを知りたい、英語の実態に少しでも近づきたい、既存の英文法の参考書では満足ができない、と感じている高校生や受験生の皆さんにも読んでもらえれば嬉しいです。

僕が受験産業に関わり始めておよそ10年が経ちましたが、常に感じてきたことがあります。それは、「全然英語が教えられていない」ということです。もちろん英語の授業はありますが、そこで教えられていることは、英語の非常に限られた一面にすぎません。つまり、「軽量化された英語」しか教えられていないのです。

実際の言語事実を目を向けることなく、英語のほんの限られた一面だけを示しながら「英語は単純で簡単だ」ということがまことしやかに言われている気がします。たしかに、高校生や受験生の負担を減らす、という意味では妥当なことに思えるかもしれません。

とはいえ、英語のことをしっかりとわかったうえで「あえて教えない」のと、「そもそも知らないから教えられない」のとでは、雲泥の差があると僕は思っています。そして残念ながら、後者である場合の方が圧倒的に多いのが実情ではないでしょうか。

例えば、次の英文を考えてみましょう。

**If not for** the work of these modern-day citizen scientists, the valuable efforts of dozens of pioneering women astronomers **may** have been lost forever. [同志社大]

「こうした現代の市民科学者の働きがなければ、何十人も先駆的な女性天文学者の貴重な努力の成果は、永遠に失われていたかもしれないのだ」

冒頭の if not for は if it were not for / if it had not been for の短縮形で、「～がなければ」という意味の表現です。この表現が使われているということは、この文は仮定法のはずです。そして、仮定法では普通「助動詞の過去形」を使うと習います。ところが、この英文では may が使われています。might でなくていいのでしょうか？

こういう場合、よくある反応は「これは間違いだ。ネイティブも英語がわかっていない」とか「ネイティブも文法はテキトーだよ」というものです。ところが、英語にたくさんふれていればすぐに気づきますが、こうした may の用例はものすごくたくさんあります。自分の知らない英語の事実、習ったことのない英語の現象を目にした時に、人はどうしても「間違いだ」と言って切り捨ててしまうものです。それはとても残念なことだと僕は思うのです。

では、高校生をはじめとした英語学習者が、こうした「習ったことのない」英語の現象にふれて疑問に思った場合、どうしたらよいのでしょうか？

学習参考書や文法書を開いてみても、どこにも書いていません（そもそも、どう調べればよいのか見当のつかない現象も多々あります）。先生に疑問を投げかけても、「わからない」と言われるか、「ただの間違い」と切り捨てられるかのどちらかでしょう。学習者が自分で調べようとする好奇心を失わせない点で、「わからない」という返答は実はかなり良い返答かもしれません（知らないものを正直に知らないと認める姿勢は教える仕事をする人間にとって非常に大切なことだと僕は思っています）。とはいえ、当初の疑問は解決されずに残ったままです。

一方、「ただの間違い」と言われてしまえば、その学習者まで正しい表現を誤って「間違い」だと思い込んでしまいます。

こんな現状をなんとかしたいと長年思ってきました。学習者が困ったときに参照できるものを提供したい。英語の先生にもう少し英語の実態を知ってほしい。そのような思いを一つの形にしたのが本書です。英語ではよく起きる現象なのに、

ほとんど教えられていない言語現象に焦点を当て、基本的な文法の知識さえあれば読めるように書きました。（なお、上の may の問題については、§24 で扱っています）

あえて入試問題を題材にしたのは、一つには、なるべく多くの方に親しみを持ってほしいと思ったからです。高校生や受験生は言うまでもなく、すでに大学生や社会人の方の多くも、高校時代に多かれ少なかれ入試問題には何らかの形でふれていると思いますから、懐かしさも感じつつ楽しんでいただければ、と考えたわけです。

一方、簡単だと思われる「受験英語」は実は全く簡単ではないのだということを知ってもらい、という狙いもあります。僕は授業で自分が知っている限りの英語の実態を伝えるように心がけていますが、「受験の英語は簡単なのだから、余計なことは教えるな」と何度も言われてきました。本書をお読みいただければ、「軽量化された英語」の知識では、「受験英語」すら十分に理解できないのだと強く実感されることでしょう。

また、本書は入試問題以外からの用例も部分的に取り入れています。そこには、仮に入試英語を隅々まで完璧に理解できてもまだ終わりではないですよ、というメッセージを込めています。入試問題に出てくる英語ですら「習っていないことだらけ」ですが、入試の枠を越える英語はもっと「習っていないことだらけ」です。その一端をお見せしたかったというわけです。

本書には皆さんが知らなかった言語事実が少なからず登場するはずですが、中には、皆さんが持つ知識・常識に明らかに反する内容も出てくることでしょう。自分が知っていることがすべてだと思わず、英語の事実を素直に受け入れる柔軟な姿勢でページをめくっていただければ幸いです。

それでは、まだ見ぬ英語の素顔を覗く旅に出かけることにしましょう。

2022年8月

山崎 竜成